

横芝の碑

(その九十四下)

昔の街道と 物語りを伝える

町原村の庚申様

町原村、と刻まれた庚申様について、町原にお住まいの吉岡常二さんをお訪ねしてご指導を頂いている中に、この庚申様が、その六十でご紹介しました「追分の道標」に劣らない「昔の街道」に関係があることが分って来たのです。

吉岡さんは「あの庚申様は昔はもつと道端に、あの向こうで建てていたそうです。庚申様の正面の道は、随分細くて粗末に見えますが、実は、追分の道標に刻まれている、はま道の入口であり、姥山、桜前から、八街方面にも通じている大事な街道でもあった訳です。昔は、人馬の往来も烈しく、庚申様も度々倒されたり、転がされたりするので、私の先祖が屋敷内に移したのが今の場所です。庚申様の前から一〇〇m程入りますと、一本の山路が横切っています。この山路を左に曲ると、はま道、右に曲ると、八幡道になります。この辺りの人々は、両方を通して八幡道と呼んでいます。昔は立派

な街道でしたが、今は全く人が通らないので、道の形もなくなった所もあります。それでも公団には残っている筈です。参考に昔の街道を歩いて見ませんか、案内しますよ、はま道から逆に歩いた方がいいでしょう」と先に立たれました。

はま道の入口というのは、振子坂を下る右側の中腹から、大総保育所の前を通り、旧役場の後の山路伝いに旧大総中の下を抜け、農協大総支所の辺りの山林から一度は県道に出て、今度は、木戸台と、牛熊の境界沿いに牛熊の八幡様に続いています。

牛熊の八幡様には、昔から六十年目毎に行われる、御興(みこし)の浜下り、という神事がありましたが、その時、本戸台からこの庚申様の前を通って、はま街道に入るのが近道であり、また本街道な筈ですが、どうしてか、この道を通らず、木戸台や町原の外側を通って浜下りをしたのが、八幡道なのです。

牛熊や木戸台に、こんな伝説があります。「昔、木戸台村の神様と、牛熊村の神様が戦いました。その時、牛熊村の神様が丁度実っていた田畔(たのくろ)豆を木戸台村の神様の顔に投げつけた処、その豆が目命中して木戸台村の神様は目がくらんでしまい、とうとう敗れてしまいました。それ以来木戸台村の人達は、誰も田畔豆を作らなくなりました。そして、いつとはなしに、お互いの村境を越えることはしないようになりました」というのです。

天明のころの古文書によりますと、木戸台村と町原村は同じ名主が支配していましたが、牛熊村の名主は別であったようです。そうしたことから、何か村同志の境界争いでもあったのが、みこし浜下りの時に、木戸台村や町原村を避けて通る原因になったのかも知れません。それでも、今でも木戸台の人々の中で、田畔豆を作付けしない人が多いこと等に、その土地の風習等もうかがわれ、興味深いものがあります。また、牛熊の八幡様の、みこし浜下りが六十年目



▲ この社の裏の方を八幡道が通っている

毎であることと、ご縁年が六十年目毎に送って来る庚申様が、浜みちの入口に建っていること等にも、何か、因縁めいたものが感じられて「やはりこの庚申様は文字のない碑としても、価値があるものだなあ」と感じました。

ともあれ、庚申様のお陰で、吉岡さんに、八幡道、はま道等の旧街道を確認させて頂けたことや、享保年間にも町原村が存在していたこと等が確認できたのですから、この庚申様は、やはり後世の人々に対しての碑として立派な価値を持っていると思います。

◎写真は、八幡道の通っている山林を県道から撮ったものです。この鳥居のずっと奥の辺りから、農協大総支所近くの県道に抜けていますが、吉岡さんにご案内頂かなければとても歩けない道筋でした。

町文化財審議会委員

小沢春光氏寄稿
(五五・七・三〇)

